

Titibu581

秩父平成10年1月 58号

今月号から5回に分けて、東洋の国からは初めての、日本で云えば陸大に相当する米国陸軍指揮幕僚大学の正規の教官として教鞭を執った松浦昇の英語との格闘の歴史を、面白可笑しく時にはシリアスに描いた手記を連載する。

## 英語との闘い 1 - 5

### 米軍陸大留学体験記



松浦 昇

予科 2-7

歩兵 5-1

(狭山市)

#### 1.はじめに

昭和59年7月陸上自衛隊33年の勤務を終了して退官した私は、その秋、米政府からリジョン・オブ・メリット勲章の叙勲を受けた。在官中、特に東北方面総監在任時の日米防衛協同施策への貢献がその受賞の理由であった。

戦時中には陸軍士官学校で来る日も来る日も徹底的に対米戦闘訓練で鍛えられ、また終戦後、各地の親戚を渡り歩かざるを得なかった惨めなどん底の窮乏生活も、終戦直前の米軍機空襲による我が家の戦災がその最大の原因であったため、米国、米国人に対する強い憎悪感は何論、英語についても生理的な嫌悪感を持つようになっていた私であった。

しかし、運命のいたずらとは言え、その後の人生において米国と深く関わりを持ち、必然的に英語との否応無しの付き合いを重ねるに至った経緯は、誠に波乱に満ちたものであった。もし私の人生の各岐路において、少しでも違った方向に曲がって居れば、現在の自分は米国とか英語とは全然無関係の人生を経て来ていたに違いなく、どうなっていたであろうか、今顧みて甚だ興味深

いものがある。

#### 2. 英語事始め 英語への興味の始まり

昭和14年高知県幡多郡中村町の中村小学校から県立中村中学校に進学した私は、多くの同級生と机を並べて生まれて初めての英語の授業を受ける身となった。

しかし、私が何となく英語に興味を持ち始めたのは、2年生の時の入江先生の授業からではなかったかと思われる。子供心にも如何にもスマートな発音をするなどわかるハイカラな先生であったが、教え方はなかなかユニークで、英語リーダーの章節の一部の丸暗記を強要された。

教室で一人一人指名して暗誦を命ぜられたが、皆の前で恥をかくのが恐ろしくて家で必死に英語の文章を覚え込んだものである。この、英語を単語の羅列で覚え、文章として把握する勉強法は、私のその後の英語学習にとって随分と効果があり、先生によって本当に良いスタートを切らせていただいたものと、今懐かしく思い返している。

#### 英語への遅々たるアプローチ

その後父の転勤に伴い高知市の県立城東中学校に転校したが、英語は引き続き私の好きな学科であった。しかし、昭和19年春入学した陸軍予科士官学校での語学はロシア語が割り当てられ、翌年8月まで全く英語とは縁の無い生活が続いた。

終戦後帰郷した高知でも、戦災で疎開した各地での最低生活の毎日で、進学も果たせず、翌21年になってやっと徳島医専に入学したものの、学資が続かなくなって9月高知に舞い戻り、結局、旧制高知高校の理科1年に入ることとなった。この間、町内への割り当ての日章村の進駐軍施設への勤労奉仕で片言の会話を交わしたのが、私の外国人の英語との接触の最初の出来事であったと記憶している。

高知高校の学生になっても依然一家の経済的基盤は貧弱で、とても安穩として勉学に専念出来る身分ではなかった。寄宿舎の南溟寮に起居して、日中は家業の高知工業学校の電機修理部で修理技術工として働き、夜同級生のノートを写して授業の内容を勉強する生活が卒業まで続いたのである。従

って英語やドイツ語も自学自習に近い状況で、期末試験に備える夜の学習のみが若干でも英語能力向上に繋がったものと思われる。

### 米軍通訳に対する反発と不満

昭和 25 年の夏、朝鮮戦争勃発と共に国内の治安維持のために警察予備隊が創設される事になり、急遽各地で隊員の募集が行われ私も受験した。地元の警察で試験官から「合格しても幹部にはなれないかも知れないが、それでもいいですか」と念を押されたが、家計を助け弟の進学を補助するためにはこの道しかないと思い、8月末、広島県の大竹で入隊手続きの後、防府の米軍キャンプに移動した。これが爾後 33 年に及び私の自衛隊勤務のスタートであった。

当時は、中央任命の正式の日本人幹部はまだ着任して居らず、米軍人のキャンプ指揮官の下に、自己申告に基づく旧軍階級の順位に従って仮大隊長以下が編成され、米軍式の訓練が慌ただしく行われたのである。米軍人に付いていた日本入通訳の中には優秀な人格者も見られたが、殆どはハウスボーイ上りなどの軍事知識の無い人達で、彼らの傲慢な態度に情けない思いをさせられる事がしばしばであった。

その年の 11 月、選抜されて江田島の旧海軍兵学校跡の米軍重火器訓練コースに入ってから、程度の差こそあれ、同じような状況が続き、通訳英語に対する憤慨は絶えなかった。

### 警察予備隊英語学校の創設と入校

昭和 25 年の暮れになり、全国統一の幹部任用試験が学科と面接の 2 度に亘って各地で一斉に行われ、私も年齢制限のギリギリの下限で受験が許されて、何とか合格、次の移動先の福岡で 2 等警察士（現在の 2 等陸尉、旧軍の中尉）に任命された。翌年の 26 年 4 月正式に第 4 管区総監部が発足し、私の訓練・運用・補給幹部としての勤務が始まった。戦術・戦法・訓練・装備全て米軍式で、そのため、米軍顧問団からの将校が常駐して指導に当たっており、全て通訳を介しての調整とならざるを得ないもどかしさが続いた。

その間、東京や久里浜などで各種の学校

が開設され、独身の身軽さを理由に逐次の課程に学生として派遣され、米軍式の教育の洗礼を受ける事となった。

27 年の春になってやっと米国留学要員を教育するための英語学校が千葉県の習志野に開設され、全国から各級幹部が選抜派遣されて、留学準備のための米軍英語の学習が始まった。これが警察予備隊の英語学校第 1 期課程である。必要に迫られて急遽開校したため、基本的な教材等も間に合わず、米陸軍の歩兵訓練教範等がテキストに代用され、教官も、全員かき集めの米軍将校たちであった。しかし、これらの間に合わせの米軍方式の実践的英語教育が、却って、その後の米本土での各種課程履修に実際にプラスする結果となり、私にとっては大きな幸いであった。

英語学校を卒業した私は久留米に新しく出来た普通科（歩兵）学校に翻訳室員兼通信科教官として赴任した。

その後、富士山麓の須走に、普通科（歩兵）、特科（砲兵）、機甲科（戦車）の 3 職種総合の富士学校が開校し、そこに移動して教官勤務と共に教範翻訳の業務を続けていた。

今回は、3. 米国本土での日本式英語 [米国軍事顧問団での留学試験]

秩父平成 10 年 3 月 5 9 号

## 英語との闘い-2

松浦 昇 予科 2-7 歩兵 5-1 (狭山市)

### 3. 米国本土での日本式英語 米国軍事顧問団での留学試験

昭和 32 年、横須賀市久里浜の通信学校に再度転属して間もなく、米国陸軍通信学校の中隊将校課程への留学候補者として留学試験を受けるよう命令を受領した。この年の日本からのこの課程への留学生は 1 名で、指名受験者は 2 名、1 名が本命、1 名が所謂「アテ馬」である。

年齢、学歴、経歴から見てどうも私の方が「アテ馬」ではないかと覚悟していたが、麻布の元近歩三連隊跡の米軍事顧問団本部で行われた筆記と口頭の留学英語試験では、何んと私の方に上位の結果が出て、ニュー

シヤージー州フォートマンモスに1年間の予定で留学が決定したのがその年の夏の事であった。

### 豪華絢爛たる JAL シティ・オブ・ナラ号

私の留学が決まった昭和32年以前の留学は、米軍の軍用船で韓国等に立ち寄りながら時間をかけて米本土に向かう海上渡航ルートが主体で、米本土上陸までタブリと英語練習が出来る利点があった。

しかし私の場合は、国際線就航後まだ日の浅い日本航空（JAL）機を利用する航空ルートが採用された。留学申告の日に、有効期間1年の羽田・サンフランシスコ間の往復搭乗券が、如何にも勿体をつけて担当者から手渡された事がいささか印象的であった。当時、JAL 国際線で渡米することはまだまだ大変な贅沢で、しがたい自衛隊の1等陸尉には望むべくもない厚遇であった訳である。

搭乗した飛行機は4発のDC-6B「シティ・オブ・ナラ」号で、搭乗客の待遇は現在の国際線ファーストクラス以上の豪華さであった。乙姫様の様に優雅なスチュワートのサービスも誠に至れり尽くせり、有り難い事に日本語が通じるので英語の練習にはあまりならなかったものの、しばし、未知の国での英語生活の不安を忘れさせてくれた。現在に較べ航続距離は短く、途中、ウエーキ島、ホノルルと給油しつつ米本土に向かったが、ウエーキの沖に沈む日本軍用船「諏訪丸」の残骸を夕日の海に見た時は、地の涯での戦没将兵の気持ちを偲び本当に感無量なるものがあった。



ウエーキ島沖に沈む諏訪丸

### 米大陸横断鉄道の旅

当時の米軍事教育機関への留学の費用は、日本と米本土間の往復渡航経費は日本政府が負担し、米国内での諸経費は米国政府持ちという事で、サンフランシスコから3日3晩で東海岸に至る特急列車の豪勢な旅の切符も、金門橋を望むフォートメイソン基地に到着後直ちに支給された。心配された英語は何とか通じたが、戦勝国の誇りの漲るシスコの壮大な町並みや、空気の澄みきった美しい金門湾の風物には、田舎者の若者はひたすら圧倒される数日であった。

列車の客室も豪華な寝台車の個室（ルメット）が与えられ、敗戦国の日本では考えられない豪勢な旅であったが、車内販売や停車駅での弁当売り等は一切無く、全食事は食堂車という次第。身振り手振り式会話の効力にも限界かあり、料理の注文には四苦八苦の状態であった。隣席に見かけた美味しそうなアイスクリームをと思って頼んでみると、なんと、形はよく似ているものの、柔らかなコッティシチーズで、口に入れて見て目をパチクリといった失敗や、旅の終点はニューヨークから更にローカル線に乗り継いだ先であったが、ニューヨークの手前のニューワークの駅で、車内アナウンスをニューヨークと聞き違い慌てて客車から飛び出し、危なく駅構内に取り残されそうになった失敗もこの時の話であった。

### 英語の大洪水に諦めの境地

米国陸軍通信学校があるニュージャージー州フォートマンモス基地は、ニューヨークの対岸にある風光明媚な高級リゾート地域のド真ん中に位置しており、観光的には当に楽天地であったが、英語能力不十分の日本人学生には苦難の地そのものであった。クラスの中には英国・カナダやビルマ・イラクのような英語系諸国の将校が多く、また台湾・韓国・インドネシアなどからの学生もなかなか流暢に英語を話すのを見て、事、「話す英語」に関しては日本は世界の最劣等国である現実を、入校早々にしていやという程痛感させられたのである。学校内の他の課程には日本からの学生も居り、夜間には日本語を話す機会があったが、教室内では一人ぼっちで、最初から最後まで英語の大洪水、頭の中は次々と切れ日なく飛

び込んでくる英語で飽和状態、机の上には横文字の学習資料が山積みといった状況であった。早い段階で、「与えられた全てのものであることを理解すること」を諦め、「取りあえず分かったものから自分のものとして行く」ことに覚悟を決めてから、気分的にもすこし余裕が出て、状況が好転して来たように思われる。所謂「わからぬ事には馬耳東風、聞き流しの戦術」である。

#### 内容についての理解力が英語学習の基

私の履修した「中隊将校課程」は通信科部隊の中隊長以下の将校を対象とするコースで、各国は少佐・大尉クラスを学生として留学させて居り、一般的には「部隊運用」を主体とするカリキュラムが組まれていたが、この年からは、大幅に「通信電子技術」が取り入れられ、高等数学理論や電磁気理論の時間が増加していたのが特徴であった。毎週の週末試験で各自の成績がオープンになるが、会話英語最劣等生の私が毎週、毎週、満点を続けた事は学校側も同級生にも不思議でならなかったらしい。何の事はない、話す言葉と違って理論的な事柄は、内容が理解されれば正解を出す事は誠に容易であるからである。

当初こちらを馬鹿にして日本語を一切口にしなかった韓国の将校達も、試験前には日本語で教を乞いに来るようになり、私の留学生活も少しずつ英語に自信が付き、次第に軌道にやって来た。

結局、この課程を日本人で初めてなんとか首席で卒業し、更にレーダー整備将校課程を履修、ニューヨーク州北部のトビハナ通信補給廠の隊付勤務を終えて、再び JAL で羽田に帰着したのは日本出国後丁度1年目の昭和33年の10月であった。帰国翌年の夏、思い掛けなく抜擢されて3等陸佐に昇任したが、これはどうも、私の留学成績の米国からの通報の結果が好影響を齎した模様であった。

これが、私の下手な英語が私の人生にプラスに作用した最初の出来事であった様に思われる。

今回は、4. 再度の留学 [フォートレブンワースの米国陸軍指揮幕僚大学]

秩父平成10年7月 60号

## 英語との闘い-3

松浦 昇 予科2-7歩兵5-1(狭山市)

### 4. 再度の留学

#### フォートレブンワースの米国陸軍指揮幕僚大学

米大陸の殆ど真ん中にあたるカンザス州フォートレブンワースは、凶悪犯を収容する連邦刑務所の所在地としても有名であるが、米陸軍将校の登竜門である米国陸軍指揮幕僚大学があることでも世界的に知られている。米軍の将校約千名が、士官学校等卒業後数年以上勤務した後の少佐を中心とする階級の時、各職種毎に選抜されて毎年この大学の指揮幕僚課程に入校して来る。

ここを卒業しないと大佐以上への昇任は困難と言われている高級将校への関門である。昭和42年入校の私のクラスでも後年、数十人の将軍を出しており、湾岸戦争で有名な元統合参謀本部議長パウエル大将もその一人である。

外国留学生は、共産圏を除く殆ど全世界の約50の国から毎年百名前後の中堅将校が入学し、誠に国際色豊かであった。当時この大学は、外国将校にとって米国で学び得る軍事最高学府であり、中・後進国の中には、帰国後直ちに政府や軍の要職に就く者が多く、世界で最も多くの国家元首を輩出した大学との噂も流布されていた。事実、私のクラスメイトの南米からの留学生が、帰国後2年位で大統領としてニュースウィーク誌上に現れた時は、この噂を肯定せざるを得なかったものである。



カンザス州の米国陸軍指揮幕僚大学

## 再び英語の洪水に見舞われる

大学の教育は午前・午後びっしりと詰まった座学による講義と学生間の討議が主体であり、前回の留学時以上に英語の能力が要求される誠にハードな環境であった。

予習資料は予め膨大な書籍や印刷物が指定されるが、英・米・カナダなどの英語国民とは異なり、我々日本人にとってはざっと読み流すにも数日以上かかる量であり、それを一晩で予習し準備することはまず不可能で、「仕方がない」と度胸を決めこんで無手勝流で教室に出るか、叶わぬまでも徹夜覚悟で横文字に取り組むか、決心のしどころであった。

結局苦心惨憺の末会得した対処法は、「まず概要把握のみに止める」エネルギー省略法であった。各資料毎に「目次」を完全に理解し、次いで「前文」と最後の「要約結言」の主要部分をメモ書きし、肝心の膨大な「主文内容」は諦めるやり方である。

この方法は教室での講義においてもなかなか有効で、随分と気持の上で余裕が出て来たものである。米国式の教育法では各課目の最後の部分で必ずその講義の「締め括り」があり、この部分さえしっかり把握すれば、時間中居眠りをしているも要点の概要が理解できるのである。前夜の予習メモにこれらを追加したシートを作り、それらを綴じたノートを準備しておけば、期末試験の準備も簡単だし、学生同士のディスカッションにおいても大変な武器となるのである。

## 学業の成績と英語の能力は必ずしも一致しないもの

前回の留学でもそうであったが、我々日本人の英語能力特に「話す英語」能力は、自慢にはならないが、外国留学生 50ヶ国・百人中最低レベルであった。

これは明治以来の日本の英語教育の弊害の結果で、誠に情けないことである。やたらに文法に固執してそれだけでなく重い口が更に重くなるのである。文法などお構いなしに喋りまくる連中から一人取り残されて、あらぬ方を眺めている格好は本当に惨めなものであった。

元来日本人は遠慮がちで、ディベート（論争）能力が欠如している上に、英語から日本語、更に日本語から英語へと複雑な翻訳

作業を頭の中で繰り返しては、ホットなディスカッションから仲間はずれになるのは当然の成り行きである。英語で聞いて即英語で対応する修練は、私にとって極めて険しいものであった。

筆記試験の方はその点誠に楽で、期末試験の結果の配布では常にクラスの最高レベルを維持しており、この時ばかりはいささか溜飲の下がる思いであった。

しかし、この大学で学ぶ目的は単に良い成績を取るのではなく、世界各国の将校と堂々と戦略・戦術論議を展開して自説を相手に納得させる能力を身につけることにあって、この観点からは「日暮れて道遠し」の焦燥感にとられる毎日であった。

終戦後既に 20 年以上が経過し、日本国内では敗戦の衝撃は徐々に薄れつつあったが、軍事面では敗戦国日本のイメージがそのまま色濃く定着しており、大学の教育においても事あるごとにこれが表面に現れ、情けなく惨めな思いをすることが多かった。

確かに旧日本軍の行動には一部指弾されるべき非違行為もあったであろうし、戦略・戦術面でも不合理・非理性的の譏りを免れ得ない事例が多々見られた事は否定できないが、総てにおいて連合国が「正」、日本が「悪」と切って捨てる尤もらしい論議には真に腹立たしいものがあつた。

前の留学時にも、毎回の情けない想いが鬱積して、訓練映画のシーンで真珠湾の米戦艦を雷撃する日本機に思わず一人だけ大きく拍手して、教室内全員の批判的な冷たい視線を浴びたこともあつた。

大学の国際法規の時間でも、敗戦国の日・独側が受けた軍事裁判の判例研究が取り上げられ、膨大な連合軍側の資料に裏付けられた「正義の名で裁かれた裁判」として、比島の「山下大将絞首刑判決」が、教官の指導下に学生間の討議に提供された。

この教育は、旧陸大を出た多くの日本留学生の優秀な諸先輩も齊しく受けてきた正規課目で、皆それぞれ悔しい思いをしながらも、じっと我慢して来たことと推測される因縁の内容であった。

今回は「5. 山下大将弁護論」

## 英語との闘い-4

松浦 昇 予科 2-7 歩兵 5-1 (狭山市)

### 5. 山下大将弁護論

#### ジョンソン・スミスは気をつけろ

陸海空の戦場の主導権を完全に奪われ、揮下部隊への統制手段を完全に喪失した最高指揮官に対して、末端の隷下部隊の残虐事案の責任を強引に追求するこの判例は、軍事史上稀有の事案であり、法の名を借りた一種の報復行為とも考えられるものである。山下大将は郷土高知の誇るべき偉人であり、戦勝国の傲慢さに過去何十人かの先輩は貝の如く沈黙を余儀なくされたとしても、小さな私の「いごっそう精神」には我慢出来ない事柄であった。授業の終わりに手を挙げて、翌日の同じ国際法規の冒頭で20分位の「意見陳述」の時間を要求したのである。

後に教官から聞いた話では、今までの日本人学生から一言も抗議も無かった事例なので、学校当局は相当驚いたらしく教官の間で問題となったが、結局一応聞いてやろうと言う事になった様である。

翌朝、教室の壇上に立った私は、皆の奇異の視線に曝されながら、必死の想いで下手な英語を開陳するはめとなったのである。

その私が開口一番言った言葉が「ジョンソン・スミスは気をつけろ」であった。ジョンソンやスミスは米国で最も多い姓である。終戦直後、戦塵未だ収まらぬ各地で、日本兵から被害を受け恨みに満ちた現地住民の無差別的な証言の前で、形ばかりの弁護人（米軍人）を付けられたものの、英語の分からない多くの日本の「佐藤や山本」が戦争犯罪人として処刑されていた事例を挙げ、ベトナム戦を遂行中の米軍人も、立場が変わってもし敗者ともなれば、同じ様に無数のジョンソンやスミスがその多い姓の故に無実の罪状で戦犯となる可能性について訴えたのである。

「正義の名において」でなく「正義の心で」で「正義の名において」膨大な法的資料に基づき行われた軍事裁判の判決を、短

時間で反論することは極めて難しい。特に下手な英語での説明では不可能に近い事であった。結局、私に出来たことは、軍人としての矜持とか名誉とか主として情緒面で訴えるやり方しか無かったのである。

マレー作戦の英雄山下大将を名誉ある軍人として扱わず、囚人服のままで絞首刑にし、罪業消滅した筈のその遺体を密かに処理し、遺族に一切返却していない事実だけでも、復讐的裁判の譏りを免れ難いと述べ、更に現在進行中のベトナム戦争での米軍の手厚い遺体本国後送措置と対比させ、皆の人道精神に訴えたのである。

次いで、ベトナムの戦野に展開している米軍50万の最高指揮官ウエストモランド大将が、果たして、末端部の小部隊の犯した残虐行為にまで死をもってその責任を負うべきだろうかと問いかけてみた。そして最後に、「軍事裁判は形式的な正義の名に依るもので無く、正義の心で裁くべきである」と述べ、騒然たる非難と賛意の声の交錯する中で降壇した。

英語能力の不足から言いたい事の10分の1も発言できなかった悔みがあったが、この「山下大将弁護論」が大学側に与えた衝撃は予期した以上に大きく、その後明らかになった米軍によるソンミ村民虐殺事件等も影響して、翌年のカリキュラムから10年近く続いてきた「山下戦犯判例」が完全に削除された事は、異国の地で非命に倒れたこの郷土の英雄に対し些かなりとも鎮魂の供物となったものと、心密かに満足したものであった。

### 6. 米軍指揮幕僚大学の教官として大学への特攻隊的な赴任

昭和43年の夏、レブンワースのCGS正規課程を卒業した私は、フォートノックスの戦車学校の短期のコースを履修した後一旦帰国し、英語能力が皆無の妻と娘2人を連れて、再び指揮幕僚大学に正規の教職員として赴任した。

当時のアジアの軍事的代表国としては、国連安保常任理事国の台湾か朝鮮戦争を共に戦った韓国が、まず常識的な国際的評価であって、戦力の無い事を懸命に国内外に宣伝していた日本は、勿論問題外の存在であった。その日本が、恰も日本も世界の軍

事代表国であると言わんばか句に、軍事模範国として大学に常駐して教育に当たっている英国等と同じ様に、連絡将校の派遣を申し入れたのである。

防衛庁としては一人でも多くの米国留学派遣の枠を大蔵省に要求するため、大学に英・仏・カナダ・ドイツが連絡将校を常駐させている事を知り、国際的影響も考えず、「ダメでモトモト」精神で闇雲に要求したのが真相のようである。

米陸軍省は驚愕し、その受入の是非をめぐって議論百出したそうである。大勢は「受け入れ反対」であったとの事であったが、最後に元校長であったジョンソン参謀総長の最終決断で急速受け入れが決定し、僅か2週間の準備で、経済的裏付けが無いまま、私の赴任が決行されたのである。

陸上幕僚長に出発の申告をした際、「大学でのおまへの仕事の具体的な事はこちらでは分らんが、向こうに行って自分で調べてくれ」との事で、勿論家族の渡航費用も国からは出ず、それに充てる為に父から譲り受けた刀剣等を処分しての慌ただし出発であった。



米軍指揮幕僚大学の校内にて(Jan.1986)

### 日本軍事学講座開設

大学側は、日本からの連絡将校を受け入れる事は、日本をアジアの代表国として国際的に認知する事になりかねないとして、当初は消極的であったが、決定後は誠に積極的で、学校内の事務室や専属女性秘書の無償提供を始め、学部長に準ずる各種の手厚い待遇を与えてくれ、物心両面にわたって私の日本軍事学講座の開設を支援してくれたのである。

これは、私が開校の卒業生であり、「山下大将戦犯否定論」で問題を醸した点があったものの、卒業成績が幸運にも最上位区分

のA（トップ7%以内）であった事が、学校側に若干の好影響を与えたのかもしれない。ただ、開設後の長年の努力の蓄積を待つ英・仏・加・独の連絡将校と異なり、私の場合は全てゼロからの出発であり、教育内容の設定、資料の収集、教材の作成など公的な準備の他、大学史上最初の日本人家族としての生活基盤の設定の問題があった。

日本軍事学の主体は、陸海空自衛隊及び旧軍の編制、装備、戦法や大東亜戦争などの戦史に関するものであり、旧軍資料については東京の陸自幹部学校の資料では十分でなく、米国海兵隊や英国陸軍の戦時中の対日本軍研究資料が大いに役立ったのはまことに皮肉な事であった。

問題は、講義資料等は全て正式の英語でしかも大学規定の修辞法に依って、年末の授業開始時までには準備しなければならない事で、英語が全然出来ない妻や娘達の各学校転入手続きなど、手間の掛かる業務もこなしながらの膨大な資料翻訳作業等の連続で、全く気の遠くなるような忙しさであった。 次回は「トラ・トラ・トラ」

秩父平成11年1月 62号

## 英語との闘い-5

松浦 昇 予科2-7歩兵5-1(狭山市)

### 6. 米軍指揮幕僚大学の教官として

「トラ・トラ・トラ」

米国式授業の大きな特色として課目開始直後の「ジョーク」が挙げられよう。

ジョークの英語そのものも俗語が多用されて聴き取りにくく、その上国民性などの違いから、日本人には殆ど理解できないものが多かった。元々我々日本人は生真面目で、「ジョーク」とは縁遠い国民である。ところが、教授計画を作る立場になってみると、「郷に入っては郷に従え」で、義務的にも何とかせねばならない事になったのである。私の担当した正規必修課目の「日本の防衛」の冒頭において、フオート内で上映中のハワイ空襲映画「トラ・トラ・トラ」をもじって、何とか考え出したのが私の第1号の「ジョーク」であったが、これがなんと、大受けの大喝采であった。

ところが、その馬鹿受けの理由がこちら

の考えもしなかった「下ネタ」に通ずるものだったと後で知らされ、大冷や汗の結果となったのである。

この1学年1300入の学生を対象とする3時間の講義では、学生の関心を高めるため、正面の大スクリーン一杯に課目の標題と共に戦艦「大和」を擁する連合艦隊の勇姿を映し出し、バックミュージックにお馴染みの軍艦マーチをかけての衝撃的なスタートを切ったのである。

そして、昔の帝国海軍は「虎」であったが、今の海上自衛隊は最新鋭の駆逐艦隊ではあるものの、「トラ・トラ・トラ」でなく所詮「子猫・子猫・子猫」程度だと謙遜して、「プッシーキャット・プッシーキャット・プッシーキャット」とジョーク化したのが運の尽き、大爆笑を誘ったのである。今の日本の若者なら、「プッシー」とか「キャット」が何を意味するか分かるだろうが、30年前の私には無理な話であった。

最前列に並んだ女性将校達が顔を赤らめながらも、それでも、しきりに拍手してくれていた姿が妙に嬉しく印象的であった。

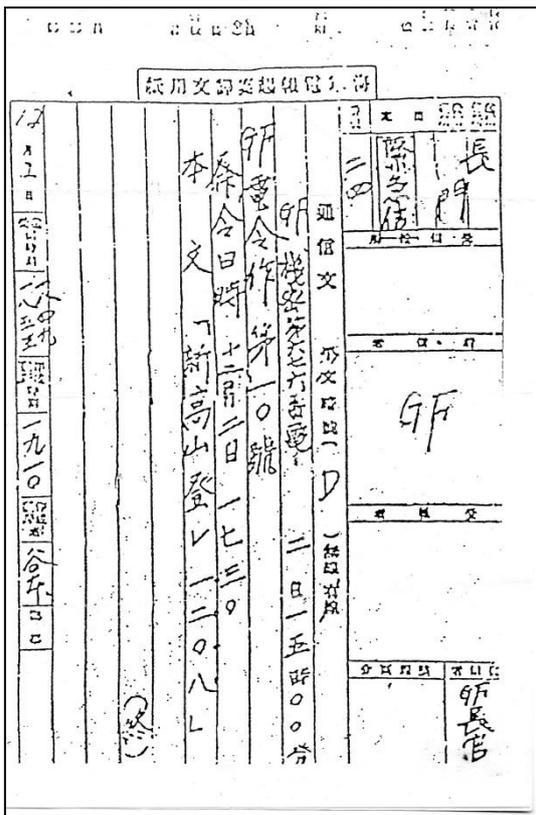


「我奇襲に成功セリ」赤城からの電文  
トラ・トラ・トラ

語りかける講義：目は口よりも、ものを言い

この3時間の必須課目では、仏独等の連絡将校達は、準備してきた原稿を読みながら講義を進める方式をとる場合が多かったが、時間管理がきちんとして出来る利点はあるものの味気なく、また上手ではあるが、訛のある英語が理解しにくい憾みがあった。

英語能力が劣る私が彼らの真似をしたら全く悲惨な結果となることは明白である。そこで開き直って、原稿を読まず、学生の目を見ながら口頭で講義を進める事とした。3時間の内容を総て記憶する事は不可能であるので、骨子となる主要項目、表現内容、正確な用語、挿入する寸話などを正しい手順で展開できるよう繰り返し暗記した。また、興味を喚起し、内容を理解させ、更に話す時間を短縮するため、努めて広報映画、スライド、ビューグラフ、録音テープなどの教材を多用した。学生の方を万遍なく注視しながら話しかけるので、相手も居眠りもしにくくなるし、アジア唯一の軍事組織紹介というもの珍しさもあって、下手な英



「真珠湾を攻撃せよ」大本営からの長門宛の電文：1208は開戦日を指定

語にもかかわらず概ね熱心に聞いてくれたのには感激したものである。

やはり、対話的ムードの方が何とか言葉の不備をカバーしてくれるものらしい。3年間のこの講義で、学生からの強い関心と反応があったのは、74戦車等の独創的な国産装備や可愛い女性自衛隊員の紹介シーンで、これはやはり万国共通の感性なのであろうか。

## 7. カンザスの野に眠る偽名の兵士

指揮幕僚大学から車で2時間ばかりの所にフォートライレイ陸軍基地がある。

常時、師団規模の部隊が駐屯している広大な施設である。戦時中は日本やドイツの捕虜収容所が置かれていて、当時不幸にも死亡した両国の兵士の墓地があり、私も偶然の機会からその事実を知り、公式の墓地参拝を基地に要請した。

司令官の厚意で儀仗隊も参加してくれる事になったが、現地に着いて見て大きな衝撃を受けたのである。見事に整備されている独軍墓地に比べて日本軍墓地には苔むした簡素な墓石が30基程悄然と並んでいるのみであった。係官の話では、ドイツの墓地には遺族の来訪が多く供花も絶えないが、日本側は誰も来る者がなく、私の訪問が戦後四半世紀で最初だと、早速、帰宅後墓石に刻んである名簿を東京に報告し遺族を調べてもらったところ、関係先の返答では「該当者無し」であった。捕虜の身を恥じて、本名を言わずに死んで行った兵士の悲しさに涙が止まらない想いであった。



カンザスの野に眠る日軍無名戦士の墓

大学で太平洋戦史を教えながら、日本軍高級指揮官・参謀等に対する米側評価が極端に辛辣である事に驚いたが、勝者の立場

から敗者を厳しく批判するのは当然とも言えよう。

しかし事、日本軍の下士官や兵士についての評価は反対に極めて高く、今でも学生間で「世界の理想的な軍隊とは、韓国の兵士、日本の下士官、ドイツの将校、アメリカの将軍で構成される組織」と言われる程である。

この最後まで戦い捕虜になった日本の兵士が遥々とカンザスの地に送られ、偽名のままで、肉親の訪れも無く寂しく墓石の下に眠っている姿には何とも遣り切れなく、その後何度かお参りし持参した日本酒を注ぎながら、「旧日本軍の裏付けの無い精神主義」に対し、只々暗澹たる気持ちであった。

## 8. 終わりに

昭和58年の秋、私の指揮下の陸上自衛隊東北方面隊と、米国陸軍第9軍団との協同指揮所演習「ヤマザクラ5演習」が仙台市の駐屯地内で実施された。

日本側からは、青森の第9師団と山形の第6師団等、米側からは、在日米陸軍の他、ハワイの第25歩兵師団、カルフォルニアの第45歩兵師団等が参加する、指揮官・幕僚を主体とする大規模なものであった。

演習の性格上、米側の階級構成は高く、第9軍団司令官フィアンド中将以下多くの将軍を含み、大佐以上だけでも数十人を擁する大陣容であった。有事には国民皆兵の国是を持つ米国であるので、参加将校の約半数は訓練召集中の予備役で、その中には現役の大学学部長・教授や弁護士、会社社長、裁判官、州上院議員などの指導者層が多く含まれており、軍と一般社会との密接不離の関係を如実に示すものであった。

日米協同演習といっても、先ず第一に言葉の問題があり、更に国情の大きな差異から、相互の意志の伝達に極めて大きな障害が存在していた。

日本側には大きな英語コンプレックスが、また、米側には敗者に対する謂れなき優越感や高慢が存在していた事も、否定出来ない現実であった。

かねがねこれらを苦々しく思っていた私は、語学の障害で日本側の真価が認識されない状態を解消するため、日英両文による事前準備を十分徹させ、軍事英語の研修を

重点的に強行した。演習間に難しい問題が生じ、幕僚間の調整が暗礁に乗り上げた場合は、直接私自身で米側司令官に会い、通訳抜きで相互の意志を確認し合い、何とか急場を切り抜けた事もしばしばであった。

幸い、米側のワイアンド中将以下高級将校は全員レブンワースの卒業生であり、私にとっては同窓会のような雰囲気、この時程、米国での「下手な英語で頑張った辛い体験」を有り難く思った事はなかった。

演習は結局、終始日本側のリードで展開されたが、大成功で、初めて現地を視察した米太平洋軍司令官クラウ海軍大将も自衛隊側の能力を絶賛し、この種演習では稀有の、全太平洋軍布告で予想以上の成果を喧伝してくれたものである。中村中学でスタートした私の下手な日本式英語が、幾多の思いがけない困惑や苦難に遭遇しつつも、確実に私の米国生活を支えてくれ、更に、現職最後のステージで何とか国際的に実を結んでくれたものと、そもそもの口火を点けて下さった入江先生の暖かいご薫陶に心から感謝申し上げた次第である。